

平成29年度 教育支援部 研究のまとめ

1 研究概要

(1) 研究主題

子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方
～効果的なアセスメントから「はこだて子どもサポートシート」を活用した支援の実践へ～

(2) 主題設定の理由

本市においては、就学指導部会の審査において特別支援学級と判断されるケースが年々増加しており、とりわけ「自閉症・情緒障がい」特別支援学級の学級数は、10年前と比較して、小・中学校ともに約3倍となっている。また、通常の学級においても、教育上特別な配慮を要する子どもが増加している。

このような状況を踏まえ、特別支援教育を充実するためには、子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な支援を行うこと、教職員一人ひとりの専門性の向上を図ることなどが必要である。

そのため、平成29年度の函館市学校教育推進の指針「アプローチ」において、重点指導事項Ⅱに「組織的な支援による特別支援教育の『定着』を目指して」を挙げている。その中において「特別支援教育に係る取組の総点検」では、「(1) 校内支援体制の総点検」「(2) 個に応じた支援の総点検」「(3) 全ての教職員の専門性の向上に関する総点検」を挙げ、制度化されて10年が経過した特別支援教育を見直し、次の10年へ生かしていく取組を強調している。

このようなことから、今年度の教育支援部では、特別支援教育に係る校内支援体制や運営計画に関して研究し、そのモデルを提示して各学校の成果と課題をより明確化できるようにしていきたいと考えた。同時に、本市が作成・配布している「はこだて子どもサポートシート」について、支援体制や運営計画に“作りどころ”“使いどころ”を明記し、その効果的な活用を目指すとともに、作成にあたってのアセスメントの充実や、実態に合った活用方法、支援の方策等をより具体的に示すことで、更に子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図ることができると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究目的

「はこだて子どもサポートシート」を基に、組織的、計画的な支援を行うための実践的な方策を明らかにすることにより、子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の充実に資する。

(4) 研究仮説

校内支援体制の組織図や年間計画を作成するなど、校内支援体制の充実を図ることにより、「はこだて子どもサポートシート」作成の取組が充実し、効果的な活用ができるであろう。また、効果的なアセスメントを基にした、個に応じた支援の手立てを示すことにより、教職員一人ひとりの知識・技能が向上し、教育的ニーズに応じた指導・支援ができるであろう。

(5) 研究内容

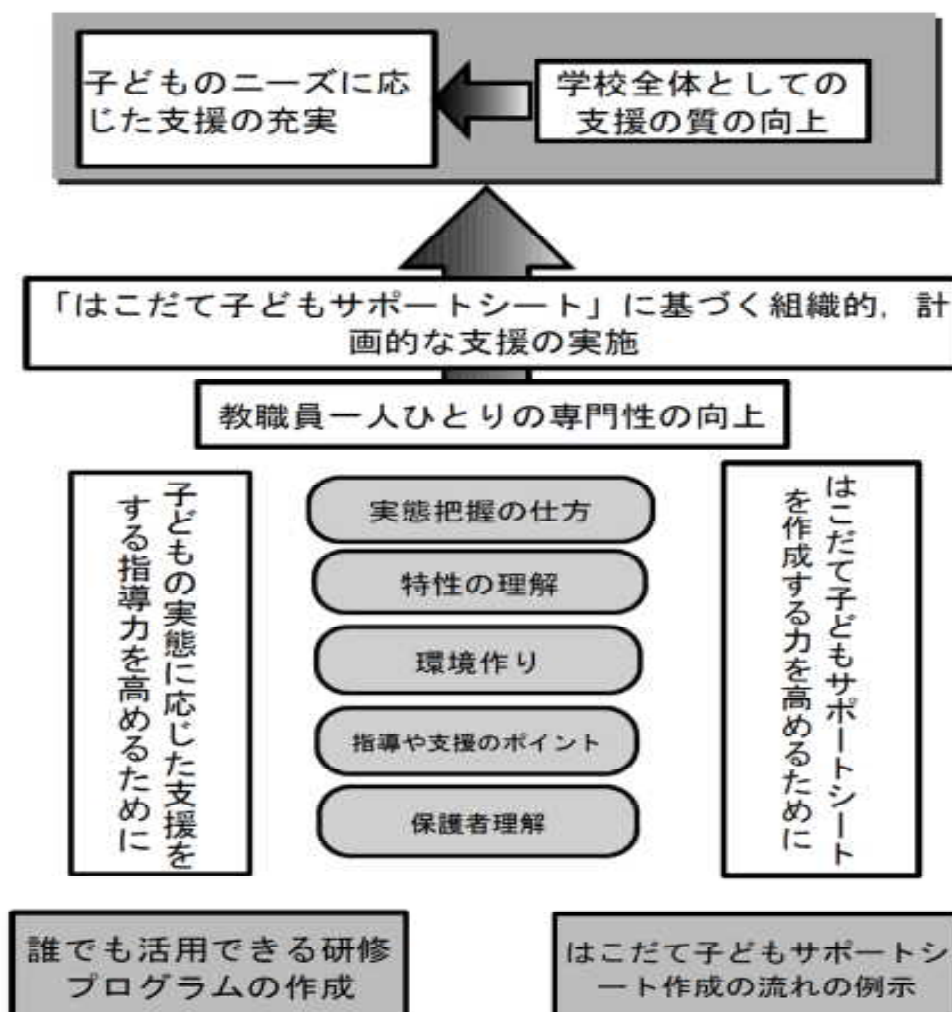
- 「はこだて子どもサポートシート」の効果的活用を目指した取組
- 支援方法や手立ての決定から「はこだて子どもサポートシート」作成までの取組

(6) 研究計画

本研究は3カ年計画において推進する。

平成27年度	平成28年度	平成29年度
○ 「はこだて子どもサポートシート」の作成のしかたについて ○ 特別支援教育の理解を深めるための研修の進め方について	○ 「はこだて子どもサポートシート」の効果的な活用について ○ 「はこだて子どもサポートシート」の実践に基づいた検証	○ 「はこだて子どもサポートシート」の活用を通じた組織的な対応と教職員の専門性の向上について

(7) 研究構想図



2 「はこだて子どもサポートシート」を活用した効果的な取組

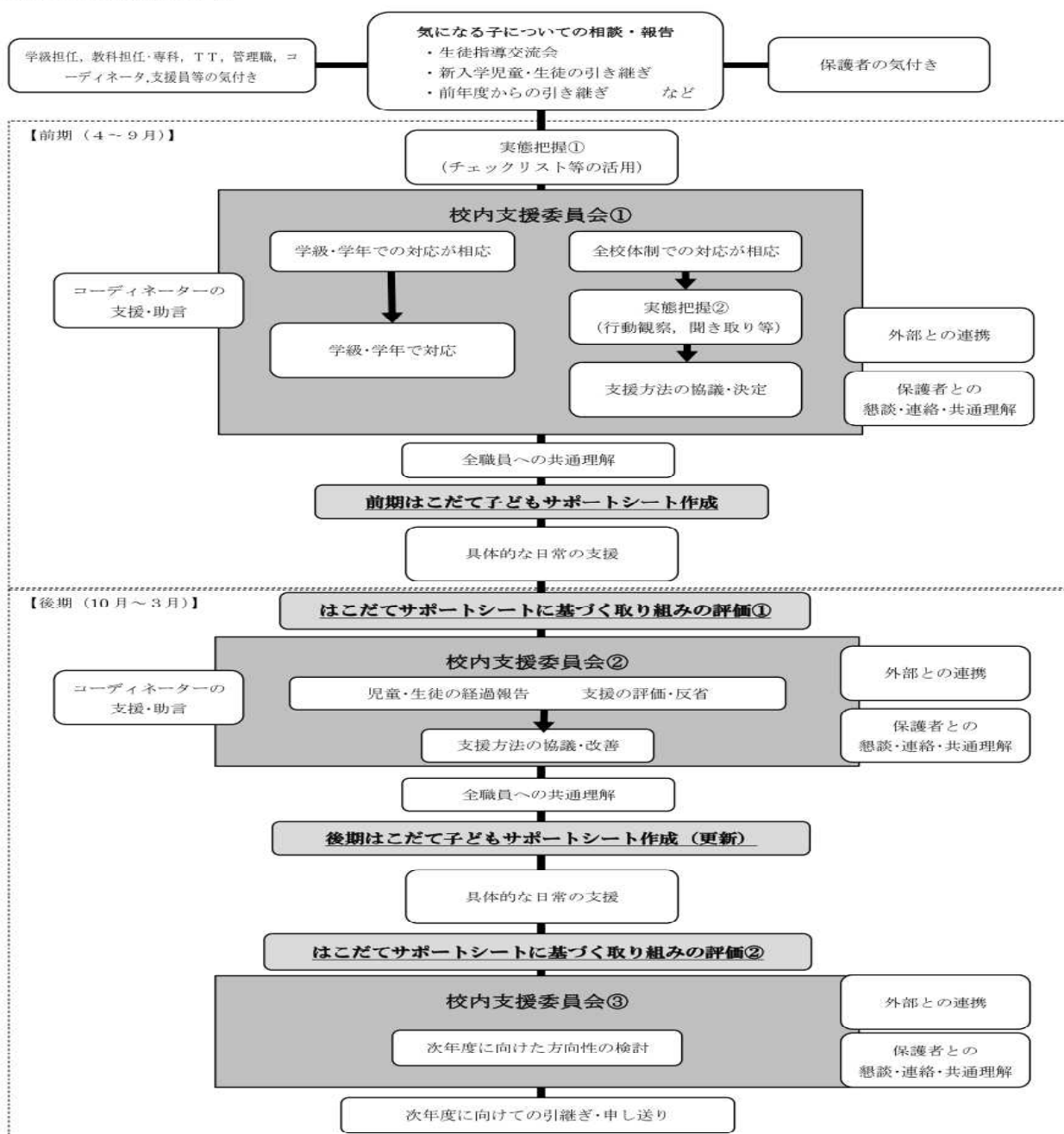
(1) 校内支援体制のポイント

特別支援教育が始まって10年が経過し、各学校では特別支援教育コーディネーターの配置や校内支援委員会の設置など、校内体制の整備は進んできた。しかし、「いつ」「誰が」「どこで」「何を」行うのかが明らかにされていないために、学校によっては組織的な取組につながっていない実態も見受けられる。

そこで本研究では、函館市内で先進的に特別支援教育を行っている小・中学校の校内支援体制を参考にしながら、「校内支援体制組織図」「校内支援推進年間計画」のそれぞれのモデルを作成し、「いつ」「誰が」「どこで」「何を」行えばいいのかを例示した。

そして、その中に「はこだて子どもサポートシート」を明確に位置付け、「はこだて子どもサポートシート」の“作りどころ”“使いどころ”を提示することとした。

◎校内支援体制組織図モデル



年間計画モデル

月	内 容	担 当
4～5月	・ 気になる児童生徒についての相談・報告 生徒指導交流会・新入学児童・生徒、前年度からの引き継ぎなど	
	・ 実態把握①（チェックリスト等の活用）	集約：コーディネーター 実施：学級担任、教科担任等・専科、TT、管理職、コーディネータ、支援員等
	・ 校内支援委員会①（サポート内容の精選）	委員メンバー
	・ 全職員への共通理解（職員会議等）	コーディネーター
	・ はこだて子どもサポートシート作成	学級担任等
6月	・ 具体的な日常の指導	
7月		
8月		
9月	・ はこだて子どもサポートシートに基づく取り組みの評価①	学級担任、教科担任等・専科、TT、管理職、コーディネータ、支援員等 →学級担任等
10～11月	・ 校内支援委員会②（サポート内容の精選）	委員会メンバー
	・ 全職員への共通理解（職員会議等）	コーディネーター
	・ はこだて子どもサポートシート作成・更新	学級担任等
12月	・ 具体的な日常の指導	
1月		
2～3月	・ はこだて子どもサポートシートに基づく取り組みの評価②	学級担任、教科担任等・専科、TT、管理職、コーディネータ、支援員等 →学級担任等
	・ 校内支援委員会③（サポート内容の精選）	委員メンバー
	・ 次年度へ向けての引き継ぎ・申し送り	学級担任 コーディネーター等

作成されたはこだて子どもサポートシートの方方向性に沿った支援を、実施していきます。

作成されたはこだて子どもサポートシートの方方向性に沿った支援を、実施していきます。

学級に支援が必要な子どもがいた場合、これまでの実態の多くは、学級担任が「実態の把握」「支援方策の考案」「サポートシート（指導計画等）の作成」と全ての取組をしなければならない状況にあった。そこで、「実態の把握に関する情報収集」は特別支援教育コーディネーター、「支援方策の考案」は校内支援委員会、最終的な「サポートシート（指導計画等）の作成」は学級担任という形を基本とし、それを計画的に行えるようにモデルを作成した。

このモデルを提示することによって、特別支援教育の校内体制が確立していない学校はもちろんのこと、確立している学校にとっても既存のものと比較し、見直すことができるなど、さらに充実した校内体制を構築できるものとする。

(2) 実態の情報収集の手段

① 情報収集を進める観点

子どもの支援を考える際に手がかりとなる情報を、いろいろな角度から集めて整理する。

主な内容としては、家庭や学校での気になる点やつまずきの様子（学習、身の回り、遊び、コミュニケーション、社会性など）、興味や関心のあることや得意なこと、保護者・本人の願い、これまでの指導や支援の状況、諸検査の結果、関係機関とのつながり等がある。

※ 情報収集の視点・内容等は、校内委員会等で適宜検討し、全教職員で共通理解を図っておくことが大切である。

校内での情報収集

- 好きな教科や得意分野
 - ◆教科や学習活動に関する好み
 - ◆興味・関心のあること
 - 苦手な教科や不得意分野
 - ◆教科や学習活動、生活全般についての困り感
 - コミュニケーション・社会性
 - ◆友達関係の状況 ◆遊び
 - 日常生活のスキルに関する情報
 - ◆基本的な生活習慣や移動、作業に関する能力など
 - 前担任からの引き継ぎ情報
 - ◆1年間の成長の様子、次の担任に伝えておく必要がある情報
 - 幼稚園・保育園からの情報
 - ◆小学校入学前の様子
- 特に、集団参加・活動状況・心配と思われること等知っておくべき情報
- 子どもに関わる関係職員
 - ・学級担任
 - ・ＴＴ・専科の教員
 - ・特別支援学級担任
 - ・特別支援教育コーディネーター
 - ・通級指導教室担当教員 等

保護者・本人からの情報収集

- 生育歴
 - ◆保育歴、療育歴、相談歴など
 - 家庭の様子
 - ◆家族構成や家族関係、家庭環境など
 - ◆学習、身の回り、遊び、コミュニケーション、社会性など
 - 保護者・本人の願い
- 本人から直接情報を聞く場合は、休み時間や放課後等を利用するとよい。
 - 特に心配を感じていない保護者から情報収集したい場合は、子どもの学校での様子を伝えることから始めてみる。

関係機関からの情報収集

- 知能・心理検査等の情報
 - ◆知的な発達の状況
 - ◆社会性の発達の状況
 - 医学的な情報
 - ◆診断・病気の有無
 - ◆身体機能、視機能、聴機能
 - ◆情緒の安定
 - ◆投薬、療育手帳の有無
- 必ず保護者の同意を得る。
 - 知能検査等が実施済みの場合
→検査の数値だけでなく、検査の目的や、今後学校生活で配慮すべき点を得るようにする。

＜保護者・本人からの情報収集にあたって＞

保護者から教育上特別な配慮を要する子どもの情報を得る場合、特に配慮しなくてはならないことがある。それは、対象となる子どもの特別な支援（指導）を本人や保護者がどのように理解しているかどうかということである。

○ すでに関係機関と相談や連携をしている保護者の場合

- ・家庭訪問や個人懇談、個人調査票等を利用し、入学前の情報を得ることができる。
- ・保護者の不安や心配等を理解し、一緒に乗り越えていこうという気持ちやスタンスをもつことが重要である。

○ 何となく不安を感じている保護者の場合

- ・連絡帳や個人懇談等を有効に活用し、最初に保護者が抱えている不安を共有しながら、担任として心配な点を丁寧に説明し、学校での子どもの様子を適切に伝える。
- ・保護者と一緒に情報を集め、共有していこうとするスタンスが必要である。

○ 特に心配を感じていない保護者の場合

- ・連絡帳などを活用し、子どもの学校での様子を伝えることから始める。
- ・子どものマイナス面や困った点ばかりを伝えるのではなく、「担任として努力はしているが、子どもの困り感にうまく寄り添えないため保護者の考えを得たい」というニュアンスが重要になる。

＜関係機関からの情報収集にあたって＞

関係機関から情報を得る際には、必ず保護者の同意と了解を得るようにする。

○ 特別支援学級に在籍している子どもや通級指導教室を利用している子どもの場合、すでに個別の心理検査（知能検査や発達検査等）が実施済みの場合もある。その際、検査等の数値だけを聞いても指導や支援には生かすことができないため、検査の目的や内容、検査結果から得られる学習や学校生活で配慮すべきこと等を情報として得るようにする。

○ 薬を服用している児童の場合、ケースによっては、医師も学校での子どもの様子を知りたいと希望する場合がある。そのような場合は、互いに協力しながら情報交換していくことが、子どもへの支援の質を高める結果につながっていく。

② 情報収集の方法

○ 本人から直接聞き取る。

→本人から情報を聞き取る場合は、休み時間や放課後等を利用し、雑談の中から何気なく聞き取っていくことが重要である。

○ 聞きたい情報を質問紙に整理し、相手に記入してもらう。

○ 学校生活全般や特定の場面の様子を一定期間観察する。

観察の視点を明確に

- ・学力の状況
- ・授業中の行動
- ・友達関係
- ・日常生活スキルに関すること 等

どんな点に困り感をもっているか？
どんな点は適応しているのか？

情報収集を行う際に注意すべき視点

- ① 情報収集の目的と観察の視点を明確にしておきましょう。
- ② 欲しい情報を具体的に書き出してみましょう。(家庭環境は？ 友だち関係は？ など)
- ③ 自分で得られる情報とそうでない情報を整理して、いつ・誰が・どのような情報を収集するか、決めておきましょう。
- ④ 情報収集の手順や方法に無理はないか、確認しましょう。
- ⑤ 得られた情報から何を読み取るか、確認しておきましょう。
- ⑥ 関係機関から情報を得る際は、保護者の同意が必要です。
- ⑦ 子どもや保護者の気持ちに寄り添い、信頼関係を十分培った上で、生育歴や相談歴等の情報を得るようにしましょう。
- ⑧ 校内支援委員会を十分活用し、他の職員からの情報を得るように心がけましょう。
- ⑨ 子どもは成長し状態は変化することを忘れずに、一度得た情報が妥当かどうか確認しましょう。
- ⑩ 得られた情報を指導や支援に生かすことができているか、自己評価しましょう。

③ 誰が情報収集するか

通常の学級に在籍している子どもの場合

- ・特別支援教育コーディネーターが中心となって情報を収集する。
- ・特別支援教育コーディネーターや校内委員会のサポートなどを受けて、チームを組んで情報収集を行い、学級担任等が中心となってサポートシートを作成することが大切である。

特別支援学級に在籍している子どもの場合

- ・特別支援学級担任が中心となって情報を収集する。
- ・通常の学級で交流及び共同学習などを実施している場合は、通常の学級担任と役割分担を含めた連携を図ることが大切である。

通常の学級に在籍し、通級による指導を受けている子どもの場合

- ・通級指導教室の担当教員が中心となって情報を収集する。
- ・通常の学級担任と役割分担し、きめ細かな情報のやり取りが必要である。

特に、通級指導教室での指導内容と通常の学級での指導内容の整合性や、特別な指導の効果を通常の学級で確認するということなども含め、情報収集においては十分な連携が必要である。

（３）支援方法や手立ての決定からサポートシート作成まで

○ 具体例から見る目指すべきステップの立て方

～学習場面，生活場面，人との関わりの場面でのステップの提示とサポートシート例～

教育支援部では，より効果的に「はこだて子どもサポートシート」を活用するために，校内の支援体制や年間の推進計画など，周りの環境を整えることにも注目した。

その一方で，実際に困っている子どもにどう支援していくか，ということは，やはり教育支援部の取組として重要なポイントである。

具体的にどのような場面で，子どもが困っているのか，主に３つの場面について考えた。

- １ 授業時間に困っている子どもについて（事例１，事例２）
- ２ 日常生活で困っている子どもについて（事例３，事例４）
- ３ 人との関わりで，困っている子どもについて（事例５，事例６）

最後には「自分でできること」を目標にするために，段階が必要と考え，「ステップ」という言葉を活用して各段階を整理した。

ステップ①は「先生と一緒に行動できる」という段階

ステップ②は「先生が指示することによってできる，または周りを見て何をすべきかを把握し，できる」という段階

ステップ③は「自分で見通しをもって考えて行動できる」という段階

事例 1

場 面：授業時間

気になる姿：板書を写したり，文字を書いたりすることに時間がかかる。



目指す子どもの姿

- ステップ① 先生と一緒に書いたり，先生が書いた文字をなぞったりする。
- ステップ② 「ここまで書いてごらん」などの指示を受けて書き写すことができる。
- ステップ③ 自分で板書を書き写したり，文字を書いたりすることができる。



考えられる支援

- ・黒板の周りにできるだけ物を置いたり貼ったりしない。
- ・強調したいところを色チョークで囲むなどして，視覚的に分かるように示す。
- ・ICTを活用し，同じノートを使用して板書を分かりやすくする。
- ・板書内容を書いたノートを渡し，自分のノートの隣に置いて書かせる。
- ・書き写す文字数は，始めは少なくし，徐々に増やしていく。
- ・ワークシートなどを活用し，キーワードだけ書き込むようにする。
- ・学年にかかわらず，ノートのマス目を大きくする。行間をあける。
- ・記憶しやすくするため，言葉や文を短くする。
- ・チョークで板書をするよりも短冊を用意することで，より注目しやすくする。
- ・乱雑な文字でも，書いたことを認める。



事例 2

場 面：授業時間

気になる姿：指示が一回で通らないことが多い。



目指す子どもの姿

- ステップ① 先生の繰り返しの指示で行動することができる。
- ステップ② 先生が言わなくても，周りを見て何をすべきか考え行動することができる。
- ステップ③ 周りを見なくても，先生の指示がしっかり伝わり，自分のすべきことを自分で考えて分かる。



考えられる支援

- ・指示は一つにして，一つが終わったら次の指示を伝える。（一度に複数の指示をしない。）
- ・話を聞かせるときは，手に物を持たないなど，話を聞くことに集中できる環境をつくってから指示する。
- ・いつ，何を，どうやってするかなどについて，順序立てて具体的に伝える。
- ・絵や写真・文字などを使って，視覚で分かりやすく伝える。
- ・全体に指示を伝えた後で，気になる子のそばへ行き，分かりやすく伝える。
- ・指示内容のポイントを伝え，復唱させる。
- ・聞いたことや見たことを，その場でメモに取らせる。
- ・子どもの興味のあることで意識を向けさせてから，指示を伝える。



はこだて子どもサポートシート（通常の学級）記入例

（作成日：平成29年5月1日）

第2学年1組	氏名	事例1
--------	----	-----

学校での様子

【生活】

- 友だち関係などにも大きな問題がなく、誰とでも仲良くできる。
- 行動が少し遅れがちになる場面がある。

【学習】

- 授業中の板書が遅く、定められた時間内で書き切ることが難しい。
- 作文や感想文などを書くのも時間がかかる。

短期目標（9月まで）		指導内容・場面	指導・支援方法	評価（子どもの様子）
生	活	・指示を理解し、素早く行動する。	・学校生活全般	・指示をする場面では、必ず短く簡潔な言葉で指示を出す。
学	全般	・指示された内容をしっかり書き取る。	・各教科の授業	・板書事項や書き取り事項を簡潔、色分けなど本人が分かりやすいものにする。 ・書く分量についてもあまり多くせず、見通しをもたせながら書かせる。
	国語	・自分の考えや思い・気持ちを書き表す。	・作文・感想文	・場面ごとでの感情や気持ちを箇条書きする。 ・本人が書きやすい定型文を作り、そこに自分の感情を当てはめていく。

事例 3

場 面：日常生活

気になる姿：整理整頓が苦手だったり、忘れ物を何度も繰り返したりする。



目指す子どもの姿

ステップ①教師と一緒に決められた場所にものを片付けたり、道具を揃えたりする。

ステップ②周りからの声掛けによって決められた場所にものをしまったり、道具を揃えたりする。

ステップ③自分で決められた場所にものをしまったり、道具を揃えたりする。



考えられる支援

- ・ロッカーや机の中の片付け方を写真やイラストなどで図示する。
- ・机や道具箱の中に仕切りを付けて、どの位置に何を片付けるのか決めておく。
- ・不要なものは、こまめにしまうように声掛けを行い、活動を最後まで見届ける。
- ・持ち物の整理日を定期的に設ける。
- ・どうしても散らかる場合は、一時的に入れておく箱を作り、まずそこに入れることを声掛けする。
箱の中身は、後でしまう練習をする。
- ・持ち物をチェックできる表を用意し、本人と一緒に確認する時間をつくる。
- ・持ち物について必ずメモに取り、メモを見るように習慣付ける。メモを貼る場所を決めておく。



事例 4

場 面：日常生活

気になる姿：予定が変わると不安になりやすい。熱中すると行動の切り替えが難しい。



目指す子どもの姿

ステップ①教師と一緒に予定の変更を確認し、その予定に沿って行動する。

ステップ②周りからの声掛けによって予定の変更についての理由が分かり、できるだけ落ち着いて行動する。

ステップ③予定の変更についての理由が分かり、内容を自分で確認し、落ち着いて行動する。



考えられる支援

- ・予定の変更があるときは、先に伝えておく。
- ・変更内容は、口頭だけでなく、視覚的に確認できるように明示しながら説明する。行く場所(教室)や行う内容を示す絵や文字による説明をスケジュール表に加えたり、時間も書いたりする。
- ・変更理由と変更した後は何をするのかを丁寧に説明する。
- ・終了前に、「あと〇分で終わります」などの合図を出す。
- ・時間の感覚が乏しい場合には、時計やタイマーなど目に見えるものを使って意識させてみる。
- ・本人の意見も聞きながら相談して終了のタイミングを決める。
- ・本人が興味・こだわりを強くもっている場面では、その場면을継続することによって安心感を得ている場合がある。その場合、時間を決めるなどして、終了のタイミングを本人と確認することが大切であり、本人が気の済むまで付き合ってあげられるような時間と場所を設定する。



はこだて子どもサポートシート（通常の学級）記入例

（作成日：平成29年5月1日）

第3学年2組	氏名	事例3
--------	----	-----

学校での様子

【生活】

- 机の中やロッカーの整理整頓ができない。
- 物の管理ができず、すぐに無くしたり忘れたりする。

【学習】

- 授業中の机上の整理ができず、活動の取り掛かりに時間がかかる。

教研式C R T	国語	関心・意欲・態度（A）	話す・聞く（B）
		書く（B）	読む（B） 言語（B）
	算数	関心・意欲・態度（A）	数学的思考（B）
		技能（B）	知識・理解（B）

（H28年7月実施）

短期目標（9月まで）		指導内容・場面	指導・支援方法	評価（子どもの様子）
生	活	・決められた場所に物を一人で置けるようにする。	・学校生活全般	・机の中やロッカーに置く物を決め、手本の写真を見ながら、同じように置けるようにする。
学	全	・必要な道具のみを机に出すようにする。	・各教科の授業	・授業毎に必要な道具を明示し、それが置かれた手本の写真を見ながら道具を準備できるようにする。
	習 図 工	・机上进行整理できるようにする。	・創作活動など	・1時間の授業の中で、定期的に整頓タイムを設け、小まめに整理整頓する習慣を付ける。 ・どうしても散らかる場合は、一時的に入れておく箱を用意し、入れさせる。できるだけ乱雑な状態の机上で作業をさせないようにする。

事例5

場 面：人との関わり

気になる姿：順番を待つことができない。



目指す子どもの姿

ステップ①教師と一緒に順番を待つことができる。

ステップ②教師や友達の言葉掛けに応じて、順番を待つことができる。

ステップ③場の状況に応じて、一人で順番を待つことができる。



考えられる支援

- ・「〇〇に並んで」「〇番目に並んで」「〇〇くんの後ろに並んで」など具体的な指示を出す。
- ・待つ場所、並ぶ場所を目で見て分かるように示す。
- ・周りの児童に協力を求め、声を掛けて並ぶ場所を教える。
- ・順番を待つことができている他の児童をほめ、場の状況に注目させ順番を待てるように促す。
- ・タイマーや順番カードを活用し、自分が後どれだけ待てばよいか目で見て分かるようにする。



事例6

場 面：人との関わり

気になる姿：感情のコントロールができず、衝動的に行動してしまう。



目指す子どもの姿

ステップ①教師と一緒に、相手の気持ちや場に合った言動を考えたり、気分転換の方法を考えたりすることができる。

ステップ②状況に応じて、相手の気持ちや場に合った言動を取ったり、気分転換を行ったりすることができる。

ステップ③自分で相手の気持ちや場に合った言動をとったり、気分転換を行ったりすることができる。



考えられる支援

- ・その都度正しい話し方を教える。
- ・言って（やって）いいこと、悪いことの具体例を一緒に話し合い、約束を決める。
- ・約束が守れたか確認し合い、守れたら「がんばりカード」にシールを貼るなど、がんばりを実感できるような工夫を図る。
- ・個別に、相手の表情や動作の意味を伝えたり、一緒に考えたりする時間をつくる。
- ・アイコンタクトや表情、身振りなどを使った遊び（エクササイズ）を取り入れる。
- ・気持ちを上手に受け止めてくれそうな子どもを近くにするなどして、関係の広がりを工夫する。
- ・通級指導教室などで、ソーシャルスキルトレーニングや気持ちのコントロール等について個別



はこだて子どもサポートシート（通常の学級）記入例

(作成日：平成29年5月1日)

第 4 学 年 3 組	氏 名	事例 6
-------------	-----	------

学校での様子

【生活・學習】

- 思いついたことをすぐ口に出してしまうなど、衝動的に行動してしまう。
- 感情のコントロールができず、授業中でも教室を飛び出してしまうことがある。

教 研 式 C R T	国 語	関心・意欲・態度 (B)	話す・聞く (C)
		書く (C)	読む (B)
	算 数	関心・意欲・態度 (B)	言語 (B)
		技能 (C)	数学的思考 (B)
		知識・理解 (B)	

(H28年7月実施)

短期目標（９月まで）		指導内容・場面	指導・支援方法	評価（子どもの様子）
生活・学習	・周りの状況を見て発言できるようにする。	・授業時間 ・学校生活全般	・『自由発言 OK カード』『自由発言 OFF カード』を作り，そのカードを見て，発言をするようにする（発言することも保証してあげる）。 ・どうしても話したいときは「先生，ちょっといいですか？」と聞いて，許可を得てから話す。 ・振り返りの時間を設け，褒めてあげたり，好ましい行動を教え，事後の生活に生かしたりする。	
	・自分の感情を教師に伝え，次の行動の指示をもらえるようにする。	・授業時間	・感情を表すカードを作り，そのカードを提示したら，本人と相談をし，必要であれば落ち着ける場所でクールダウンするように指示をする。 ・振り返りの時間を設け，褒めてあげたり，好ましい行動を教え，事後の生活に生かしたりする。	

3 平成29年度の研究成果と課題

昨年度の研究で、特別支援学級でも通常の学級でも使いやすい「はこだて子どもサポートシート」の様式を作成するとともに、実際に教育支援部員でシートを作成・活用し、各学校で支援を実践してきた。その結果、特に通常の学級では、1枚のシートにしたことから取り組みやすくなったという成果があった反面、まだまだ「はこだてサポートシート」が先生方には認知されていないことが課題として挙げられた。

また、「やるからには完成度の高いものを」「短期間で成果を」という思いが強く、そのために結果として具体的な指導・支援を実行するまでに時間がかかってしまったり、二の足を踏んでしまったりするなどして、なかなか実践が具体的に進まないケースも実際にはあると捉えていた。

今年度は、そのような課題を受け、「はこだて子どもサポートシート」を現場により一層浸透させるためにはどうすればよいかという点について検討するとともに、シートを作成する前段階として、校内支援体制を整えることで、「はこだて子どもサポートシート」に記入する流れができるのではないかと考え、今年度の研究の柱とした。

また、シートを作成する上で悩むことが多い、支援方法の実践例もいくつか紹介し、各学校で取り組みやすいように努めることとした。

(1) 成果

- ・「支援体制組織図モデル」、「年間推進計画モデル」を例示し、「いつ、誰が、何をすべきか」を具体的に示したことで、教育上特別な配慮を要する子どもの指導・支援について、学級担任だけに任せるのではなく、学校全体で組織的に取り組む必要性を伝えることができた。
- ・「支援体制組織図モデル」や「年間推進計画モデル」に「はこだて子どもサポートシート」の作成時期や活用場面等を明確に位置付けることができた。
- ・学習（授業時間）、日常生活、人との関わりの場面でよく見られる子どもの様子から、具体的な支援の方法を考える上で、①先生と一緒に取り組む、②先生の声掛けで取り組む、③自分から取り組む、という3ステップ方式で整理することが有効であると確認することができた。
- ・サポートシートを作成する上で、具体的な事例を紹介することができた。特に、通常の学級における記入例については、昨年度よりもさらに具体的な記入例を示すことができた。

(2) 課題

- ・各学校の校内支援体制については、特定の教職員のみで対応するなど、組織として十分に機能していない例もあるようである。また、校内支援委員会の活性化や校内支援体制の充実、特別支援教育コーディネーター個々の力量に左右されてしまっているという実態があるのも事実である。
- ・特別支援学級未設置の学校の校内支援体制をどのように充実させていくかという点も課題であり、特別支援教育に対する全教職員の共通理解を、より一層深めていく必要がある。そのためには、校内研修等で特別支援教育や校内支援体制等の内容を積極的に取り上げることの一つの方法であると考えられる。
- ・「はこだて子どもサポートシート」自体の周知徹底をどのように図るかという点が課題である。昨年に比較すると、徐々に周知されつつあるようにも感じられるが、依然十分に認識されているという実感がもてない状況にある。

4 3カ年の研究のまとめ

教育支援部では、平成27年度より「子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方～効果的なアセスメントから『はこだて子どもサポートシート』を活用した支援の実践へ～」を研究主題として、3年間を通して研究を進めてきた。

(1) 成果

3年間の研究で、「はこだて子どもサポートシート」に関して、より現場の実態に即した活用方法を提示することができた。通常の学級に在籍している子どもへの指導・支援を実現していく際に、「保護者の承諾」というのは一つの大きなポイントとなる。従来の「はこだて子どもサポートシート」も、原則的には「保護者の承諾」が前提となるものだった。しかし、教育支援部では支援の共通理解や学年間・学校間での引き継ぎ・申し送りに特化した形の、より作成しやすく、見やすい「はこだて子どもサポートシート」を提示することができた。

また、「はこだて子どもサポートシート」の作成および効果的な活用方法や、特別支援教育に関する専門性向上のために、効果的なアセスメントのポイントやいくつかの具体的な場面を設定し、それに対応する具体的支援などの提示もできた。

(2) 課題

課題としては、「はこだて子どもサポートシート」の具体的実践や支援方法の具体的検証が挙げられる。その理由は、「はこだて子どもサポートシート」の記載について、プライバシーに関わることも多く、細かな部分までの例示が難しいことが挙げられる。また、支援方法についても、対象の児童生徒によって千差万別であるため、モデルの提示に留まり、具体的な実践としての検証までには至らなかった。

加えて、学校現場での「はこだて子どもサポートシート」の認知度が低く、「はこだて子どもサポートシート」の本来もっている有効性・有用性を十分伝えるまでには至らなかった。

今後は、多くの学校現場に「はこだて子どもサポートシート」の有効性・有用性を引き続き伝えていくとともに、「はこだて子どもサポートシート」を活用した指導・支援の実践を増やし、それらを蓄積していくことで、より活用しやすい環境を整備していくことが必要だと考える。

5 次年度の展望

本研究では、「はこだて子どもサポートシート」にスポットを当て、3年間の研究を進めてきた。この3年間で「はこだて子どもサポートシート」そのものの内容の精査や作成方法など、“ソフト面”での研究が進んだと考える。その一方で、「はこだて子どもサポートシート」を活用する組織体制や運用する教職員の内面的資質などの“ハード面”の質的向上については、今後も課題であると考ええる。

特別支援教育が始まって10年、「特別支援教育」という言葉は広がり浸透はしてきたが、「特別支援教育の視点」が生かされた指導や支援については、まだ不十分な現状があると認識している。その理由の一つに、「特別支援教育」は「特別な支援を要する子どもだけのものである」という認識が、今なお一部の教員の間にはあると感じるからである。また、「特別支援教育の視点」に立った指導・支援が、通常の学級の子どもにとっても有効なものであるとの認識が、十分にはなされていないのも原因であると感じている。

「特別支援教育の視点」に立った指導・支援は、個別の指導・支援に有効なだけでなく、通常の学級における一斉指導の場面や、日常生活についての指導、児童・生徒とのラポールづくり、保護者への対応等、教員が取り組まなければならないあらゆるものに通じることが多い。それを学校現場に幅広く知らせていく、または“今までやってうまくいっていたことは実は「特別支援教育の視点」に立った指導・支援だった”ということに気付かせる機会をつくっていくことがとても重要であると考ええる。

以上のことなどから、次年度以降の教育支援部の研究の方向性としては、「全ての子どもに対する支援の質の向上」を目指した、「特別支援教育の視点を生かした指導・支援の在り方」についての研究を深めていきたいと考えている。

主な参考文献

- ・特別支援教育のためのヒント集「できた！わかった！」
～障害のある幼児・児童・生徒への効果的な指導・支援に向けて～
大阪市教育委員会（平成23年3月）
- ・「通常の学級担任がつくる個別の指導計画」
廣瀬由美子・佐藤克敏 編著 東洋館出版社（平成18年）
- ・「教育センターだより」
宇都宮市教育センター
- ・「子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方
～効果的なアセスメントから「はこだて子どもサポートシート」を活用した支援の実践へ～」
平成28年度教育支援部 研究部まとめ
- ・平成29年度 59号 函館市の学校教育推進の指針「アプローチ」
函館市教育委員会

〔研究担当者〕

【教育支援部：平成29年度研究員】

松 本 啓 資（函館市立湯川中学校教諭） 西 崎 佳寿子（函館市立亀尾小学校教諭）
高 谷 亜 姫（函館市立中央小学校教諭） 北 村 明 子（函館市立中の沢小学校教諭）
大河原 美 穂（函館市立北昭和小学校教諭）

【指導主事】

堤 勝 幸
酒 井 光 史
辰 巳 哲 治
小 林 郁
永 吉 幸 平